

# 日本IT書紀

069 V T 信管

04 含牙篇  
卷之九 修羅

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

## V T 信管

### 一

ガダルカナル島から日本軍の撤収が完了した（とされる）一か月後の一九四三年三月十二日、アメリカ統合参謀本部主催の太平洋軍事会議で「エレクトロン作戦」が採択された。戦争の運営にかかる中長期の基本方針という意味なので、こんにち的にいえば「戦略」と表記すれば分かりが早い。

ガダルカナル島を制圧したことで、連合国軍は勝利の手応えを確実にした。その前段階として、四二年八月から九月にかけて、アメリカ陸海軍・政府首脳は太平洋の戦いにかかる「レインボー計画」、日本を占領・支配する「ダウンフォール作戦」を立てていた。

このうち「レインボー計画」は海軍省のアーネスト・キング作戦部長が提唱したもので、ハワイを拠点として、中部太平洋のサモア↓ギルバート諸島↓マーシャル群島↓トラック↓グアムと太平洋上の島々をしらみつぶしに制圧し、日本本土に上陸して首都・東京を占領するというものだった。

た。これが実施されていたら、平塚から藤沢にかけての湘南海岸は、欧州戦線におけるノルマンディ海岸になっていた。

しかし状況が変わった。

海軍の現場で戦争指揮に当たっている第三艦隊司令長官のハルゼー、太平洋艦隊司令長官のニミッツ、第十六任務部隊司令官のスプルーアンスといった諸将が反対した。

ガダルカナル島の戦闘とソロモン海戦で連合国軍は制空権と制海権を手中にした。太平洋上の島々を占拠している日本軍は放っておけない。補給がなくなれば立ち枯れるであろう、というのである。

だけでなく、ボーイング社の開発による空の要塞「B-29 スーパーフォレスト」が姿を見せつつあった。全長三十メートル超、両翼全幅四十三メートル、機体重量三万二千キロ超という巨大な爆撃機であって、高度一万メートルを航行し、最高時速六四〇キロ、航続距離四八〇〇キロ、最大九トンの爆弾、貨物を積載することができた。

当初、アメリカ軍は対日爆撃の基地として中国・湖南省のどこかを想定した。東京まで直線距離で二千四百キロなので、ぎりぎり往復が可能である。修理や補給が容易なインド西ベンガル州カルコタ（カルカッタ）を本拠として、中国に設置する前線基地を併用する案が固まった。

ただしその時点で実戦配備が可能なB-29は一機も存在していなかった。量産が始まったのは四三年の秋以後であつて、対日爆撃を専門とする第二十爆撃集団が編成され、カルカッタの空軍基地に配備が始まったのは四四年三月である。

——それまでの間に陸・海軍が役割を分担しつつ、フィリピン島から北上する。

というマッカーサー案が採択された。

四三年十一月、カイロで開かれた米・英・中首脳会談（カイロ会談）でアメリカ政府が示した議案書に

——可能であればグアム、テニアン、サイパンもB-29戦略爆撃の基地とする。

という文言が盛り込まれたのは、そのような事情によつて

ともあれガダルカナル島の攻防のあと、マッカーサーが指揮する陸軍第六、第八軍とハルゼー麾下の太平洋艦隊が連携しつつ、日本に圧力をかけていくことになった。この作戦の中に、連合艦隊司令長官・山本五十六の暗殺、イギリス軍ビルマ戦線の支援および、日本本土爆撃などが入っていた。

ビルマ戦線は、日本にあつては「インパール作戦」（ウ

号作戦）と称される。一九四四年の一月七日に大本営において作戦が認可され、三月八日に進軍が始まった。

日本陸軍の戦争は中国戦線が好転せず、ガダルカナル島を拠点にアメリカとオーストラリアを分断する構想が失敗に帰していた。鉄か船か、鉄鉱石か支援物資かという行き詰まりを打開する策であつたにもかかわらず、

①インドから雲南を経由して中国に支援物資が送られて  
いるルートを遮断する

②インドのチャンドラ・ボースが指揮する反英組織と連  
携してイギリス軍とアメリカ軍を分断する。

という目標が設定された。

ベトナム戦争でアメリカ軍が「ホーチミン・ルート遮断」を標榜して北ベトナムを爆撃したことを思い出す。

これについて大本営は、

——我が陸軍が戦うべき相手はイギリス軍であつて、なぜならイギリスを攻撃することはナチス・ドイツを側面から支援することになるからである。海軍が太平洋で戦っているアメリカ軍との戦争は、所詮、今大戦の副次的なものに過ぎない。

という何とも珍妙な理屈をひねり出した。

二

日本においては、陸軍でさえ開戦直前に山下奉文が計算機と暗号の必要性を認識していた。だが大本営は、アメリカ軍の暗号解読力と総合的な機械生産力、さらに電子技術の効用を甘く見ていた。

なかでも「VT信管」と呼ぶ装置は、真空管の技術ものをいった。

VTとはアメリカ軍が外部に秘匿するために付けた仮の名「Variable Time fuze」に由来する。正式な呼称は「Proximity fuze」、日本語に訳すと「近接ヒューズ」ということになる。

それまでの砲弾は、爆発のタイミングを発射されてから何秒後と設定するか、命中した衝撃で爆発するかでしかなかった。ところが、VT信管付きの砲弾は、標的の数メートル以内到達すると、対象物に跳ね返った電波をキャッチして爆発する。

そのことにはナチス・ドイツも大日本帝国も気がついてはいた。だが実装することができなかった。発射時の過剰な荷重に耐える信頼性の高い真空管と、劣悪な条件のもとでも安定して稼動する液体電池がなければならず、かつそ

れぞれを大量に生産できなければならなかった。

これに対してアメリカ軍は、ドイツから亡命していたアインシュタインの協力もあって、一九四二年に実用化テストを始め、四三年ごろから一部で実戦配備するようになっていた。取り付けられたのは主に高射砲や高角砲など対空火砲の砲弾だった。

ただし当時の技術では、敵味方の識別ができなかった。

そこでアメリカ軍はこの砲弾を発射するとき、同じ空域に味方航空機の侵入を禁止する措置を取った。日本軍の航空機は標的の艦隊上空に掩護機がないことを不思議に感じつつ、これ幸いと突入して次々に撃ち落とされた。罫に嵌ったようなものだった。このためにアメリカ軍の撃墜率は飛躍的に向上した。

日本海軍の航空機は、対空砲が命中してもいらないのに翼がもがれ、機体に火がついて、抱えていた爆弾ごと爆発してしまふ。かつて太平洋の空を縦横無尽に飛び回り、多くの撃墜王を出した日本軍航空隊は、四四年に入るとたいした戦果をあげることができないまま、ずるずると後退して行く。

VT信管が日本の航空戦力を壊滅に追い込んだ、といわれている。

その威力が発揮された最初の大きな戦いは、一九四四年

の六月十九・二十の二日間にわたって行われた「マリアナ沖海戦」である。

同時期に日本陸軍はインパール作戦に行き詰まり、ビルマ戦線から全軍撤退の覚悟を定めつつあった。ミッドウェー海戦での敗北、ガダルカナル島からの撤退に始まった日本軍の停滞は、この時点で一気に「涸落」と呼んでいい状態に転換した。

マリアナ沖海戦は、局面においてはサイパン島の攻防戦だったが、太平洋戦争全体から見ると日本軍が策定した「絶対防衛ライン」をめぐる攻防であったということができる。絶対防衛ラインとは、アメリカ軍航空機による日本本土爆撃の射程を意味していた。その防衛作戦は日本海軍の内で「乙計画」と呼ばれ、山本五十六のあとを受けて連合艦隊司令長官に就任した古賀峯一大将が策定を進めていた。

一九四四年の三月三十一日、パラオからミンダナオのダバオ基地に向かった海軍の飛行艇が、折からの強い低気圧に飲み込まれて行方不明になる事件が発生した。その飛行艇には古賀大将以下、連合艦隊の作戦指導に当たる幕僚が搭乗していた。幕僚が携帯した革鞆には作戦遂行に関する詳細な資料が入っていた。

飛行艇はセブ島に墜落したのだが、このとき現地の抗日

ゲリラ部隊からアメリカ軍に、その資料と信号書など一式が手渡されていた。乙作戦は筒抜けになった。このことをアメリカ軍は秘匿したため、日本は知らなかった。

日本の大本営は、アメリカ軍はニューギニア↓フィリピン↓台湾↓沖縄と島伝いに北上してくると読んでいた。それとヨーロッパ戦線で六月六日に連合国軍がノルマンディ上陸作戦を敢行したため、参謀本部第二部は

「当分の間太平洋方面は積極的作戦停滞の公算あり。但し政治的に本土空襲を企図することあるべし」と分析した。

アメリカは主力をヨーロッパ戦線に投入するから、ここしばらく積極的な攻勢はない、というのである。

この判断は完全に間違っていた。

北アフリカ戦線に勝利し、イタリアを降伏させ、ノルマンディ上陸を果たした現在、アメリカ合衆国は四三年一月のカサブランカ合意に縛られず、太平洋戦線に余剰の兵力を回すことができるようになったのだ。

厚い鋼板に覆われた上陸用舟艇、水陸両用艇、ジェット燃料の火炎を数十メートルも放つことができる火炎放射器、日本軍の機関銃や対戦車砲弾ではびくともしない最新鋭の重戦車などが陸続と北アフリカ戦線から太平洋戦線に回送され、さらに四一年十二月から建造を始めていた新鋭艦五

百六十隻が相次いで就役した。空母四十五隻、駆逐艦四百八隻、潜水艦八十八隻、戦艦・巡洋艦十九隻である。

同時にアメリカ作戦本部は、ニューギニアからフィリピンを経て黒潮に沿って北上する黒潮ラインに陸軍のマッカーサー大將を、グアムからテニアンを経てサイパンにいたるマリアナ・ラインに海軍のスプルーアンス大將をそれぞれ当て、両者が競って日本本土防衛線を突破するよう煽っていた。陸軍と海軍のメンツと両大將の功名争いという組織的・人為的要素を加味して、攻撃の手が緩まぬよう引き締めを図っていた。

三

黒潮ラインではフィリピンが、マリアナ・ラインではサイパン島が、それぞれクローズアップされた。ことにサイパン島をアメリカ軍が抑えれば、最大四千キロの爆弾を搭載できる超大型爆撃機「B-29」による本土爆撃が容易になる。

同爆撃機の航続距離は五千六百キロだったから、最長で日本の仙台、長岡、沖繩、台湾までが射程距離に入ることになる。つまり「絶対防衛ライン」が崩壊する。

対して日本軍はこのとき、一トンの爆弾の搭載が可能で

最大時速四百二十七キロ、航続距離が四千六百五十キロの「一三試陸攻深山」、四トンの爆弾を搭載でき時速五百九十キロで航続距離四千キロの「一七試陸攻連山」、B-29をはるかに超える超大型爆撃機「富岳」を試作していた。

これをサイパン島に実戦配備できるようにすれば、フィリピン、ニューギニアの連合軍基地を爆撃することが可能になるわけだった。どちらにとっても譲れない戦略拠点だった。

海戦に参加した艦船は小澤治三郎中将麾下の第一機動艦隊であって、その主力は以下のようなだった。

航空母艦 大鳳、瑞鶴、翔鶴、隼鷹、飛鷹、龍鳳、千歳、

千代田、瑞鳳

航空戦艦 伊勢、日向

大型戦艦 大和、武蔵、長門、金剛、榛名

重洋戦艦 愛宕、孝雄、摩耶、鳥市、妙高、羽黒、熊野、

鈴谷、利根、筑摩、最上

巡洋艦 阿賀野、矢矧、能代

駆逐艦 朝雲、風雲、磯風、浦風、雪風、谷風、初月、

若月、秋月、涼月、霜月、野分、満潮、山雲、

長波、朝霜、岸波、沖波、藤波、秋霜、早霜、

浜風、玉波、浜波、早波、島風、白露、時風、五月雨

投入された航空機は計四百五十三機だった。内訳は戦闘機百八十、爆撃機百五十、水上爆撃機二十四、攻撃機九十九である。このほか、諸島に建設した第一航空艦隊基地の航空戦力として、テニアン島に六百七十二機、トラック島に五百五十一機、ケンダグリー島に百六十八機、ペリリユー島に二百四十機の計一千六百三十一機が配備されていた。この総兵力をもってアメリカ太平洋艦隊主力である第五十八機動部隊を殲滅しようという計画だった。

対するアメリカ第五十八機動部隊の陣容は、二年前のミッドウェー海戦のときとはまったく違っていた。ミッドウェー海戦のときアメリカ太平洋艦隊が保有する空母は三隻しかなかったが、マリアナ沖海戦には日米開戦と同時に急ピッチで建造された最新鋭の二十二隻、それと真珠湾から引き上げられ修理を完了した戦艦が艦隊に編入されていた。大型空母六、小型空母七、戦艦七である。艦船と砲門の数において、日本の連合艦隊にはほぼ匹敵する規模だった。

大型空母 レキシントン、ホーネット、ヨークタウン、バンカーヒル、ワスプ、エンタープライズ、

エセックス  
小型空母 バターン、カボット、ペローウッド、モン  
レー、プリンスストン、サンハシント、カウペ  
ウス、ラングレー

戦艦 アラバマ、サウスダコタ、インディアナ、ニ  
ュージャージー、アイオワ、ワシントン、ノ  
ースカロライナ

その他 重巡洋艦三、軽巡洋艦六、防空巡洋艦四、駆  
逐艦五十八

航空機 九百二機

帝国海軍が希求して己まなかった艦隊決戦が実現したの  
である。

六月十九日午前七時三十分、小澤部隊から二百四十一機  
の攻撃隊が舞い上がった。その中には最新鋭の艦上爆撃機  
「彗星」、艦上攻撃機「天山」が含まれていた。

### 第一次攻撃隊

〇七三〇発艦 第三航空戦隊六十四機（零戦十四、戦闘爆  
撃機四十三、天山七）

〇七四五発艦 第一航空戦隊百二十八機（零戦四十八、彗  
星五十一、天山二十九）

○九〇〇発艦 第二航空戦隊四十九機（零戦十七、戦闘爆撃機二十五、天山七）

### 第二次攻撃隊

一〇一五発艦 第二航空戦隊六十五機（零戦二十六、艦上

爆撃機二十七、彗星九、天山三）

一〇二〇発艦 第一航空戦隊十八機（零戦四、戦闘爆撃機

十、天山四）

第一機動艦隊から第二次攻撃隊が発艦しているころ、アメリカ第五十八機動部隊のリーダーが接近しつつある日本軍第一次攻撃隊航空機の機影を捕捉していた。ミッチャー中将はただちに艦載機四百五十機を上空に待機させた。日本の第一次攻撃隊は待ち受けていたヘルキヤットに襲われ、その猛攻をくぐりぬけた百九十七機が敵艦隊上空に到達した。

標的である敵艦隊の上空に機影は見えなかった。

——千載一遇のチャンス。

と見た攻撃隊は、一斉に突入していった。

ここで悲劇が起こった。

日本の戦闘機、爆撃機は、レーダー誘導の対空砲に撃ち落され、さらにVT信管付きの対空砲弾でむなしく海上に墜落していった。百九十七機中、実に七〇%に相当する百

三十八機が撃墜されたのだ。

第一次攻撃隊として飛び立った二百四十一機は、あつという間に五十九機になってしまった。

のちにアメリカ軍はこの空戦を「マリアナの七面鳥射ち」と呼んだ。

第一機動部隊の第二次攻撃隊八十三機は敵艦隊を見失って攻撃に失敗した。だけでなく、空中戦で五十四機を失った。

さらに空母「翔鶴」「大鳳」が、アメリカ軍の潜水艦が放った魚雷で撃沈した。小澤治三郎は第一機動部隊の旗艦を重巡洋艦「羽黒」に移し、艦隊の再編成を指令せざるを得なかった。

翌二十日、今度はアメリカ軍が攻撃に出る番だった。

ミッチャー中将は索敵に手間取ったが、午後四時に日本の艦隊を捉えることができた。薄暮戦となるのも顧みず、彼は艦載機全機の出動を命令した。戦闘機八十五、急降下爆撃機七十七、雷撃機五十四の計二百十六機である。

小澤は残存の七十五機を上空に待機させて迎え撃ったが、掩護の間隙を縫って低空で侵入したアメリカ軍の雷撃機が魚雷を投下した。雷撃機と潜水艦の魚雷で空母「飛鷹」が撃沈され、「瑞鶴」「隼鷹」「龍鳳」「千代田」が中・小破の被害を受けた。

四

航空機を失った艦隊は悲惨だった。

小澤部隊はあっけなく背走してしまった。

陸上の守備隊は、さらに悲劇だった。

マリアナ沖海戦の直前、サイパン島に斉藤義次中将が率いる陸軍第四十三師団など二万五千四百六十九人が上陸した。守備隊は先任の南雲忠一中将率いる海軍の陸戦隊六百六十人と合せ、三万一千七百余に膨れ上がった。このほか、同島には住民・軍属約二万五千人がいた。

ここにアメリカ軍の第五水陸両用軍団六万六千七百七十九人が上陸した。

トーチカに立てこもって闘う兵士や市民には、  
——連合艦隊がくる。

という望みがあった。

朝な夕なに、遠い水平線の向こうに何かが見えたといって島民は歓喜し、守備隊の士気は奮い立った。遠目が利く者が岬の高台に立ち、士官たちは双眼鏡で沖合いを凝視し続けた。その連合艦隊が、マリアナ沖海戦で消滅していることを、彼らは知らなかった。

さらに重要なことを、大本営は決定していた。

『機密戦争日誌』一九四四年六月二十四日付

海軍は『あ』号作戦に関し陸軍と協議の上、中止するに決す。即ち帝国はサイパン島を放棄することとなり。来月上旬にはサイパン守備隊は玉砕すべし。最早希望ある戦争指導は遂行し得ず。残るは一億玉砕に依る敵の戦意放棄に俟つあるのみ。

この決定はサイパン島の守備隊や住民には一切知らされなかった。

日本側は三万人以上の将兵と一万人を超す市民が死亡し、アメリカ軍の死傷も一万四千人を上回った。七月六日、斉藤義次、南雲忠一の両中将が自決し、七日と八日に分けて敢行された玉砕戦でサイパン島における日本軍の抵抗は終息した。

四千人以上の市民・軍属が、のちに「バンザイ・クリフ」と名づけられた断崖から海に投身し、その遺体のためにアメリカの軍船が着岸できなかつたほどだったという。

『機密戦争日誌』七月一日付

今後帝国は作戦的に大勢転回の目途なく、而かも独の様相も概ね帝国と同じく、今後逐次ジリ貧に陥るべきを以て

速やかに戦争終結を企図すとの結論に意見一致せり。即ち帝国としては甚だ困難ながら政略的攻勢に依り戦争の決を求めざるを得ず。此の際の条件は唯国体護持たるのみ。而して政略攻勢の対象は先ず「ソ」に指向するを可とす。斯かる帝国の企図不成功に終りたる場合に於ては最早一億玉碎あるのみ。

以後、「一億玉碎」という言葉が常套句のように使われていく。

七月十八日、東条英機はサイパン島陥落の責任を取って辞任し、二十二日、小磯国昭を首班とする内閣が発足した。小磯は

——自分の任期中に、わずかでも戦局を好転させ、以て次期和平内閣に指揮を譲る。  
の覚悟で臨んだ、といわれる。

実際、彼は対中和平交渉を水面下で始めていた。だが指導力において力強さに欠如していた。

八月三日テニアン島、十一日グアム島、九月十五日ペリリュー島が陥落した。

八月二十五日、中国国民政府最高軍事顧問・矢崎勘十郎中将は、対重慶政府との和平工作に「見込みなし」と報告した。

九月十八日、ソ連政府から日本の特使派遣を拒否すると  
いう回答がもたらされた。ソ連を仲介役とする和平工作も  
また頓挫したのである。

## 補注

アーネスト・キング 第六十四「真珠湾の次」補注

ダウンフォール作戦 対日上陸作戦で、台湾から北上して九州に上陸する「オリンピック作戦」と、太平洋から上陸して関東地方を占領する「コロンネット作戦」で構成されていた。作戦実施想定時期はオリンピック作戦が四十五年十一月、コロンネット作戦は四十六年春とされていた。海軍内で検討された計画に過ぎなかったが、マリアナ沖海戦で日本の航空戦力が壊滅的な状態に陥り、サイパン島を制圧してB-29による戦略爆撃が容易になったことから、日本の無条件降伏をにらみながら本土上陸の両面作戦が正式に決定された。

ウィリアム・ハルゼー William Frederick Halsey, Jr. / 1882  
 1959。航空戦闘部隊司令官兼第二空母戦隊司令官としてアメリカ海軍の航空母艦の指揮を取った。ドゥーリットル部隊による東京初空襲の指揮を取った。四二年南太平洋方面軍司令官となり、ソロモン沖海戦、ルンガ沖海戦などを通じて南太平洋地域での連合国軍優勢を決定づけた。

チェスター・ニミッツ 第五十七「駆け引き」補注

レイモンド・スプルーアンス Raymond Ames Spruance / 1886-1966。最終階級は海軍大将。四二年五月、病氣療養のため一時離任したハルゼーに代わって第十六任務部隊司令官となり、空母「エンタープライズ」でミッドウェー海戦に臨んだ。エンタープライズから発艦した攻撃機の爆弾が日本の空母「加賀」「赤城」に致命傷を与え、さらに空母「飛龍」「重巡洋艦」「三隈」

を撃沈する戦果をあげた。

B-29の量産 四三年の秋から量産に着手したが、インドと中国の飛行場建設の遅れ(ブルドーザーやクレーンがなく、人手で工事が進められたため)もあって計画は大幅に遅れた。四四年一月には九十七機が完成しているべきところ、飛行可能な機体は一機しかなかった。二月に入って「カンザスの戦い」と呼ばれる突貫工事がジョージア州マリエッタ工場でスタートし、三月下旬にB-29の編隊がインドに向けて出発した。ちなみに編隊はイギリスを経由してインドに向かった。

チャンドラ・ボース Netaji Subash Chandra Bose / 1897-1945。国民会議派議長のとときインド独立闘争についてガンジーやネルーらと路線を異にし、初めヒトラーに枢軸国軍のインド侵攻を直訴した。しかし対ソ戦に最も力を注いでいたヒトラーはこの提案を拒否したため、ボースは今度は日本に協力を求めた。四三年インド独立連盟東亜代表者大会で自らを首班とする「自由インド仮政府」の樹立を表明した。大日本帝国政府は独立国家として承認するに当たって「領土と人民を基礎とする国家の存在が不可欠である」とする見解に沿い、日本海軍が占領中のアンダマン、ニコバル両諸島を自由インド仮政府に帰属させることを決定した。

日本が無条件降伏した直後、ソ連との連携を探るためサイゴンから飛び立った飛行機が墜落して死去した。その墓は東京・杉並の蓮光寺にある。しかしインドでは戦後長く生存が信じられ、ソ連領内でボースを見たという目撃証言が後を絶たなかった。

アインシュタイン Albert Einstein / 1879-1955。ドイツのウルムという町のユダヤ人一家に生まれ、十二歳でユークリ

ツド幾何学を独学した。一八九四年家族はイタリアに移住し、アインシュタインはスイスのチューリヒ大学に進んだ。一九〇五年スイス特許局職員だったとき「相対性理論」「光子仮説」「ブラウン運動理論」の論文三篇を発表し、これが認められてチューリヒ大学教授となった。二一年にノーベル物理学賞を受賞したが、それは光子の存在を指摘する光電効果の発見に対してだった。

ナチスによるユダヤ人迫害が激しさを増した一九三三年、ロバート・オッペンハイマーの勧めでアメリカ大統領ルーズベルトに原子爆弾の開発に貢献できるといふ内容の手紙を送り、これが容認されてアメリカ合衆国に亡命した。亡命後はプリンストン高等学術研究所で研究を続けたが、彼の亡命をきっかけに原爆開発プロジェクト「マンハッタン計画」がスタートし、VT信管が実現した。

**サイパン島** 北マリアナ諸島の中で最大の面積を持つ。紀元前から「チャモロ」と呼ばれる海洋性民族が定住していた。五一二年世界一周を目指すマゼランの艦隊が上陸し、スペイン王妃マリ・アンヌの名にちなんで「マリアナ」と命名した。のちスペインがドイツに売却し、第一次大戦で大日本帝国の信託統治に入った。同島には大日本帝国の南洋庁支所があって、太平洋委任統治領の中心となっていた。「太平洋の防波堤」といわれたゆえんである。アメリカ軍が占領してのちは日本本土を爆撃するB-29の基地となり、戦後はアメリカ政府の信託統治となった。

**古賀峯一** こが・みねいち / 1885 ~ 1944。佐賀県に生まれ海軍兵学校、海軍大学校を出て一九一七年少佐。二六年在フランス日本大使館付武官、二七年ジュネーブ軍縮会議全権団随員、三二年少将に進み軍令部参謀、三六年中将、三七年軍令部次長、

四二年大將・横須賀鎮守府長官を経て四三年二月山本五十六のあとを受けて連合艦隊司令長官となった。四四年三月三十一日、バラオにあった総司令部がアメリカ軍機の猛爆撃を受けたときフィリピンのダバオに移動するため乗込んだ水上艇が強い低気圧に巻き込まれ遭難した。四月五日「殉職」と断定され、死後、元帥に昇格した。山本五十六の撃墜死を「海軍甲事件」、古賀の遭難死を「同乙事件」と呼ぶ。

**ノルマンディ上陸作戦** 上陸作戦の準備は四三年春から開始され基本計画は四四年四月に固まっていた。しかしドーバー海峡上空が天候不順のため実施が順延された。当初「Dデイ」(作戦実施日)は六月五日だったが折からの暴風で順延され、六日も悪天候だったがナチス・ドイツ軍の隙を衝くことができるという戦略的な判断もあってゴースインが出た。上陸軍第一波はイギリス三個師団、アメリカ二個師団、空挺部隊はイギリス一個師団、アメリカ二個師団で、計八個師団だった。

**重爆撃機「深山」** しんざん 一式陸上攻撃機を大型化した重爆撃機。実際の最高速度は三百九十キロ/時、積載可能重量は八百キロで、六機が製作されたが、速度の問題から輸送用として使われた。

**爆撃機「連山」** れんざん 陸上への爆撃に絞って開発された重爆撃機で四機が試作されたが実戦配備はされなかった。

**超大型爆撃機「富岳」** ぶがく エンジンを六基を備え、最高七百八十キロ/時で十五トンの爆弾を積載、二十ミリ機銃四基を備える超大型爆撃機。アメリカ本土爆撃を構想し陸海軍共同で計画された。しかし当時の日本の技術的には完成させることは難しかった。

小澤治三郎 おざわ・じざぶろう／1886～1966。宮崎県に生まれ一九〇六年海軍兵学校卒、三〇年大佐。三六年少将、三七年連合艦隊参謀、三九年第一航空隊司令官、四〇年中将に進み四一年第一南遣艦隊司令長官、四二年第三艦隊司令長官、四四年第一機動艦隊司令長官を兼務した。四五年四月海軍総司令長官兼連合艦隊司令長官兼海上護衛司令長官となり終戦を迎えた。

空母「レキシントン」 初代は一九二七年十二月に就役し四二年五月八日の珊瑚海海戦で日本海軍艦載機の放った魚雷と爆弾によって撃沈された。マリアナ沖海戦に参加したのは二代目艦で排水量二万七千トン、全長二百六十六メートル、最高速度三十二・七ノット／時、艦載機百三機。四三年二月に就役し九一年十一月に退役、現在は博物館として展示されている。

空母「ホーネット」 初代は一九四一年十二月に就役し四二年十月の南太平洋海戦で沈没した。マリアナ沖海戦に参加したのは二代目艦で、当初は「キアサージ」という艦名だった。四三年一月「ホーネット」の名を継ぎ、四七年予備役に編入された。その後、対潜哨戒空母として復帰し六六年アポロ宇宙船の回収に使われた。空母「ヨークタウン」 初代ヨークタウンは三九年九月大西洋艦隊に就役、四二年六月ミッドウェー海戦で沈没した。四三年四月、ボム・ノム・リチャードを「ヨークタウン」に改名、四七年予備役となったが五七年対潜空母として復帰した。七〇年再度の予備役編入後、七三年除籍となった。

空母「エンタープライズ」 太平洋戦争の全期を通じて生き残ったアメリカ太平洋艦隊旗艦。一九三八年五月に就役し、四二年六月ミッドウェー海戦で艦載機が日本連合艦隊の空母「赤城」「加賀」「飛龍」、駆逐艦「朝潮」、同年八月第二次ソロモン海戦で空母「龍

驥」、同年十月南太平洋海戦で空母「翔鶴」、同年十一月ガダルカナル沖海戦で戦艦「比叡」、重巡洋艦「衣笠」をそれぞれ撃沈するなど最大の活躍をした。四七年予備役に編入されアナポリス海軍兵学校に保存されている。のちのエンタープライズは世界初の原子力空母、かつ艦載機のほか対空砲などの兵備を持たない空母として六一年十一月に就役、「ビッグE」の通称で知られ、太平洋艦隊旗艦の座を「J・F・ケネディ」に譲った。

彗星 すいせい・ドイッ・フォッカーウルフ社から入手した設計図をもとに開発された。機首に置いたエンジンの下に冷却用外気吸引口がある独特のデザインだった。全長十・二メートル、全幅十一・五メートルで乗員二名、最高速度五百五十二キロ／時、七・七ミリ機銃三基を備え、最大五百キロの爆弾を装着できた。

天山 てんざん・一式陸攻、九七式艦攻に代わる次期主力攻撃機として設計され、最高速度は四百六十五キロ／時、十三ミリ機銃一基、七・九ミリ機銃一基を装備し八百キロ爆弾または魚雷一本を装着できた。「深山」「連山」など山シリーズの第一号機として大きな期待を集めたが、日本海軍の伝統的な防衛力軽視のため簡単に撃墜されていった。

バンザイ・クリフ 現地名は「プンタン・サバナタ」岬。岬沖合の海底十三メートルの岩礁に、一九九九年六月、ダイバーでもある東京・蔵前の浄念寺第二十六世石田住職によって慰霊塔が建立された。

# 日本IT書紀 069 V T信管

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。